令和3年度 「土砂災害防止に関する絵画･作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「西日本豪雨から学んだこと」

大分県　臼杵市立南中学校　２年　前角（まえかく）　柚花（ゆずか）

雲一つない青空の下。車から降り立った私の目に飛び込んできた、ぐちゃぐちゃになった家や土砂の山。続けて感じた何とも言えない強烈なにおい。

平成30年の夏。当時広島に住んでいた私は、大雨の影響で学校が休みになり、１日中川の様子や被害の状況などをテレビを通して確認していた。同じ県内で起きていることと分かってはいても、画面を通すとどこか違う世界で起きていることのような気がして、あまり実感がわかなかった。

雨がおさまり、父の友人が暮らす広島市安佐南区八木地区の土砂処理のボランティアに参加することになった。テレビで状況を知っているつもりだったが、実際にたくさんの家が壊れている様子や、山からの大量の水や土砂を目の当たりにすると、その悲惨さに衝撃を受けた。あまりの土砂の多さに、小学生の私は手伝いに行ったものの何もすることができず立ちすくむしかなかった。目の前に広がる悲惨な光景と美しい空との対比が、今でも鮮明に記憶に残っている。

あれから３年。平成最悪と言われた西日本豪雨がずいぶん昔のことのように感じるほど毎年たくさんの土砂災害が起きている。今年の夏も、静岡県熱海市で死者26名の被害を生んだ土砂災害が起きた。全国的にも今年の夏は大雨が続き、西日本豪雨で被災した地域でも、新たな被害が起きていた。「ちょっと買い物に出て戻ったら、家の前の道が水没しかかっていて危うく家に入れなくなるところだった」と、広島に住む幼なじみから連絡が来たときには、「何でまた広島に」と思うと同時に、天候の急激な変化に驚かされた。

こうした、「今までに経験のない大雨」や「大雨特別警報」が当たり前になっている現代の日本において、もう土砂災害は、いつ、どこで起きてもおかしくないものとなっている。だからこそ、土砂災害への対策をきちんと整えていく必要がある。

まず、砂防堰堤の建設や崖の保全が大切だ。しかし、これらの対策には長い時間と莫大な金額がかかる。調べてみると、高さ14メートルの砂防堰堤を築くのに１～４億円、付帯工事を含めるとさらに２～３倍もかかるという。長野県では、21億円を超える砂防ダムが建築されたそうだ。できあがってからも維持費や補修費がかかる。長い建築工事期間中に大雨が降って壊れてしまったら、また一からやり直しだ。

このように物理的な対策は簡単にはいかない。そこで何も手を打たないのではなく、私たち一人ひとりの土砂災害に対する意識を高めていく必要があると思う。例えば校区内に土砂災害警戒区域がある学校は、梅雨前に土砂災害についての学習や避難訓練をしてはどうだろうか。私の通う学校も、裏は山で、前には川が流れている。大雨が続いた日の後には「道路に石が転がって来て、自転車で転びそうになった」という友達もいる。石のぶつかり合う音や泥くさいにおいといった、土砂災害の兆候について学んだり、「このルートだと、途中で道がふさがってしまうかも」というように、避難経路や避難方法を真剣に考えて避難訓練をしたりすることで、土砂災害への意識が高まっていくと思う。一人ひとりが土砂災害に対する知識を十分に持ち、突然のことにも対応できるようにすることが大切だ。

土砂災害後の対策も欠かせない。土砂災害によって大切な人を亡くしたり、家を失ったりする人がいる。精神的にぼろぼろの状態でも住む場所や食べ物の心配までしなければならない。どんなに心細い思いをしていることだろう。メンタルケアはもちろんのこと、手続きを手伝ってくれるボランティアを充実させるなど、目には見えにくい問題にも意識を向けることが大切だと思う。

「力になりたいけれど、離れているから」と思う人もいるかもしれない。しかし、被災地近くの人だけでなく、被災地から遠く離れ直接ボランティアに行くことができない人でも、少しの物資を送ることで被災者を助けることができる。実際、３年前の西日本豪雨の際も、ボランティアに行っていた私の目の前に、県外からのたくさんの物資が届けられており、みんなありがたそうに受け取っていた。こうしたお互いが助け合うシステムを、災害が起きていない時に確立しておくとよいと思う。

令和3年度　「土砂災害防止に関する絵画･作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

土砂災害を前にして「自然の力はすごい」「私たちにはどうしようもない」とあきらめるのは簡単だ。しかし、大切な人を失ったとき、そんな言葉だけであきらめられるとは思えないし、私はあきらめたくない。だからこそ、今できることを考え、行動にうつし、被害を最小限におさえたい。あの夏の日、無力だった自分に胸を張って報告できるように。